

日本人英語学習者における イントネーションに関する諸問題(2)

Some Notes on the Problems of English Intonation among Japanese Learners of English (2)

中郷 慶

Kay Nakago

Abstract

Following Nakago (2017), this paper presents some of the major mistakes or problems of Japanese learners of English from an intonational point of view. Specifically, we will argue that problems arise with (pre)head. We will also see how Japanese university students understand English intonation, and how they recognize intonation in English sentences by using recordings of junior high school textbooks.

キーワード

English intonation, English pronunciation, Japanese learners of English, high (pre)head

1. はじめに

本稿がテーマとしているイントネーション(intonation)について、Armstrong and Ward (1931)は、“By intonation we mean the rise and fall of the pitch of the voice when we speak.”と述べている。また、Wells (2006: 1)は、“Intonation is the melody of speech. In studying intonation we study how the pitch of the voice rises and falls, and how speakers use this pitch variation to convey linguistic and pragmatic meaning.”であるとして、イントネーションとは話し言葉のメロディーのことだと説明している。

日本人英語学習者の間で、また、日本における学校英語教育の現場において、「英語の発音」について関心が持たれるのは、母音[æ]や[a]、子音[r]と[l]、[θ]と[ð]などの単音(分節音(segment))をどのように発音するのかということであったり、in an hour や far away などの連結(linking)やリズム(rhythm)などの超分節的(suprasegmental)な要素であったりするが、イントネーションに関心が持たれることはあまりないというのが実情である。

中郷(2017)では、英語イントネーションを理解するために必要な概念や、英語イントネーションの特徴を概観するとともに、日本人英語学習者がどのようなイントネーションの問題を抱えているかを指摘した。特に、驚くほど多くの日本人英語学習者が、特に前提条件や文脈がある訳ではないのに、次のような発音をすることを述べた。

- (1) My name is Hanna. I live in Reading.

中郷(2017: 87)で指摘したように、「彼女がハンナなのではなく、ハンナはわたしですよ」「レディングに住んでいるのは彼女ではなく、わたしですよ」などといった対比を表す文脈では、MyやIに対比強勢(contrastive stress)が置かれ、(1)のようなイントネーションとなるが、通常の自己紹介の場面では、「名前がハンナであること」「レディングに住んでいること」が新情報になるので、望ましいイントネーションは(2)に示すとおりである。

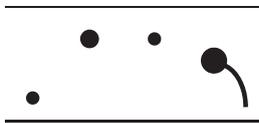
- (2) My name is Hanna. I live in Reading.

イントネーション句(intonation phrase)は、音調の動きが始まる主調子音節(tonic syllable)を中心として、前頭部(prehead)、頭部(head)、尾部(tail)などから構成される。主調子音節のはじめの高さより頭部が高いピッチの場合、それを高頭部(high head)と呼ぶ。本稿で考察するのは、すべて、平叙文が下降調で発音される場合のみであるので、ここでは、高頭部の下降調のみを図示する(中郷 2017: 85-86)。

(3) 高頭部の下降調

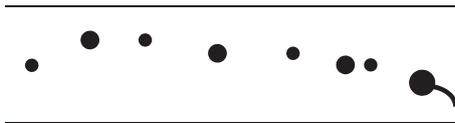
- a. 頭部に強勢のある音節が1つのみの場合

The 'food was \good.



- b. 頭部に強勢のある音節が2つ以上ある場合

The 'food she 'bought was 'very \good.



英語にはまた、特に他人と対比をしている訳ではないのに、あるイントネーション句の冒頭の無強勢音節が高く始まる場合がある。このような事例を高前頭部(high prehead)と呼ぶ。高前頭部は、低く始める場合に比べて、生き生きとしているように感じられたり、感情豊かで強調的に聞こえたりするため、英語で散見される(Wells 2006: 215, Bolinger 1986: 32)。(4)は、前頭部が記号「 $\bar{\quad}$ 」で示される高いピッチで発音されている例であるが、主調子音節、つまり、音調の動きが始まる音節は、それぞれ、coming, sorry である。

- (4) a. $\bar{\quad}$ I'm \coming.
b. $\bar{\quad}$ I'm \sorry.

(中郷 2017: 87)

アクセント) やリズムの違い(強勢拍リズムとモーラ拍リズム)については触れたが、イントネーションについては、その概念も含め、まったく説明がされていない。

3. 調査の結果と考察

3.1 回答者の背景

アンケートの設問1~4では、アンケート回答者自身のことを尋ねている。集計の結果を見ていくことにしよう。なお、本稿では、すべてのアンケート項目について結果を掲載する訳ではない。また、集計結果を表に示す場合は、紙面の関係で回答項目の表現を一部、変更していることがある。

表1 **1** 英語を学び始めたのはいつ頃ですか

① 3才以前	② 3～6才	③ 小学校1～3年	④ 小学校4～6年	⑤ 中学校入学後	⑥ 英語が母語
0人	11人	18人	24人	15人	0人
0	16.2%	26.5%	35.3%	22.1%	0%

表2 **2** 長期の継続的海外滞在歴はありますか？(数週間や1～2か月程度のホームステイや旅行を除く。)

① ない	② ある
63人	5人
92.6%	7.4%

表3 **4** 自分自身の英語に対する関心の強さを5段階で示すとどの程度だと思えますか？

① 低い	② やや低い	③ 普通	④ やや高い	⑤ 高い
4人	11人	14人	25人	14人
5.9%	16.2%	20.6%	36.8%	20.6%

設問1の集計結果からは、半数以上の学生が小学校時代に英語を学び始めていることが分かる。長期の継続的海外滞在歴に関する設問2の回答からは、回答者のほとんどに長期の継続的海外滞在歴がないことが分かり、継続的海外滞在経験があると回答した5名についても、そのうち、具体的な回答があった4名の学生は英語圏での滞在ではないことが確認できたので、5名すべての学生を今回の考察の対象外とはしないことにする。設問4からは、英語に対する関心が比較的高い学生が回答したことが分かる。設問1, 2, 4からは、日本で英語教育を受け、英語に関心がある学生が今回の考察の対象者であることが明らかとなった。

3.2 自己紹介の場面をどう読むか

設問IIは、以下のような教室における自己紹介の場面の英文を読む場合に、どのように読むかを答えさせるものである。便宜的に、それぞれの文に番号を振ることにする。ここでは、すべての文は、1つのイントネーション句(intonation phrase: IP)で読まれる¹⁾。

IP¹ Hello, everyone. IP² I'm Mary Brown. IP³ I'm from America.
 IP⁴ I like soccer. IP⁵ I play soccer every Sunday. IP⁶ I like music, too.

このうち、本アンケートにおいては、内の第2文(IP 2)から第5文(IP 5)について、文中のどの語を一番高く発音するか、強く発音するか、音調の変化をもっとも付けて発音するかを尋ねた。その集計結果は以下の通りである。

表4 5 ~ 7 I'm Mary Brown. という文(IP 2)をどのように読むか

	① I'm		② Mary		③ Brown	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一番高く発音	13人	19.1%	50人	73.5%	5人	7.4%
一番強く発音	9人	13.2%	54人	79.4%	5人	7.4%
もっとも音調を付けて発音	16人	23.5%	13人	19.1%	39人	57.4%

表5 8 ~ 10 I'm from America. という文(IP 3)をどのように読むか

	① I'm		② from		③ America	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一番高く発音	29人	42.6%	10人	14.7%	29人	42.6%
一番強く発音	5人	7.4%	2人	2.9%	61人	89.7%
もっとも音調を付けて発音	9人	13.2%	10人	14.7%	49人	72.1%

表6 11 ~ 13 I like soccer. という文(IP 4)をどのように読むか

	① I		② like		③ soccer	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一番高く発音	33人	48.5%	16人	23.5%	19人	27.9%
一番強く発音	6人	8.8%	4人	5.9%	58人	85.3%
もっとも音調を付けて発音	5人	7.4%	19人	27.9%	44人	64.7%

表7 14 ~ 16 I play soccer every Sunday. という文(IP 5)をどのように読むか

	① I		② play		③ soccer		④ every		⑤ Sunday	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一番高く発音	23人	33.8%	7人	10.3%	15人	22.1%	7人	10.3%	16人	23.5%
一番強く発音	3人	4.4%	5人	7.4%	37人	54.4%	9人	13.2%	14人	20.6%
もっとも音調を付けて発音	1人	1.5%	11人	16.2%	13人	19.1%	15人	22.1%	28人	41.2%

英語のイントネーションの「理屈」から、それぞれの文をどのように読めばよいかを考えていくことにしよう。英語のイントネーションの決定には、1) 文をいくつの音調単位に分けるか(トナーリティ(tonality))、2) その音調単位の末尾から文頭に向かってさかのぼり、主調子音節が現れる語はどれになるか(トーンシティ(tonicity))、3) その主調子音節を、上昇調、下降調などどの音調で読むか(トーン(tone))の「3つのT」が関わる(Halliday 1967, Tench 1996, Wells 2006)。通常、主調子音節が現れる語は、音調単位の末尾の内容語である。英語の文を情報構造という

観点から考察した場合、話し手と聞き手（書き手と読み手）によって前提とされ、共有されている情報を旧情報(old/known information)、聞き手（読み手）にとって新しい情報を新情報(new/given information)と呼ぶ。新情報の中で、話し手（書き手）がもっとも伝えたい部分、つまり、新情報の中でも核となる部分を焦点(focus)と呼ぶ。英語では最も重要な情報、つまり、焦点が文末に置かれる傾向があり、このことを文末焦点(end-focus)と呼ぶ、主調子音節が現れる語が、通常は音調単位の末尾の内容語であることと、文末焦点の原則は無関係ではない。

焦点という観点から、ここで考察しているIP 2からIP 5までの4つの文を見てみよう。IP 2からIP 4までの3つの文については、それぞれ、(Mary) Brown, America, soccerが焦点となるのは自明である^{2), 3)}。IP 6では、同じく、最後の内容語Sundayが焦点となるが、これについては、少し説明が必要である。時と場所の副詞および副詞相当語句は、新情報を含んでいた場合でも、イントネーション句の末尾では、焦点とならず、尾部の一部を構成する⁴⁾。

- (5) a. I had an 'unexpected 'letter yesterday.
b. There's a 'fly in my soup.

(Wells 2006: 156-157)

しかし、IP 6は、前の文IP 5を受けているためsoccerは旧情報となっており、新情報のSundayが焦点となる必要がある。（ここで再び、IP 5と同じくsoccerを焦点とするのは、情報の伝達という観点からは無意味となってしまう。）このため、主調子音節はSundayに現れる。予期されるイントネーションの一例を示すと次のようになる。

IP ¹ Hel\lo, everyone. IP ² I'm 'Mary \Brown. IP ³ I'm from A\merica.
IP ⁴ I 'like \soccer. IP ⁵ I play 'soccer every \Sunday. IP ⁶ I like \music, too.

ここで、IP 2 から IP 5 までの 4 つの文の読み方に関する設問への回答の特徴を見ていくことにしよう。

「どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて発音するか」という設問は、どの語に主調子音節が現れるのかを尋ねることと同義である。いずれの文についても、焦点となる語が「音調の変化をもっとも付けて発音」するとして最も多く選択されているが、IP 2については57.4%、IP 5については41.2%に留まる。

IP 2からIP 5までは、いずれも、主語Iで始まる文である。IP 5のIに主調子音節が現れると考えている回答者はわずか1人（1.5%）であるが、IP 4, IP 3の順でIに主調子音節が現れるという回答が増え、IP 2にいたっては16人（23.5%）もの学生が、主語Iが音調の変化をもっとも付けて発音すると回答しているのは特筆すべきことである。また、IP 2のIを「一番強く発音する」という回答が9人（13.2%）にのぼっていることも注目に値する。

その他、IP 2からIP 5までに読み方について気になる点は、IP 2において本来のMary 'Brownではなく'Mary ,Brownと考えている学生が圧倒的に多いこと、IP 5において焦点ではないsoccerを「一番強く発音する」と回答している学生が半数以上の54.4%にのぼることである。

3.3 自己紹介の場面をどう聞くか

設問IVは、設問IIと同じ部分の音声を聞き、どのように聞こえるかを答えさせるものである。その集計結果は以下の通りである。

表 8 20 ~ 22 I'm Mary Brown. という文(IP 2)をどのように聞くか

	① I'm		② Mary		③ Brown	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一番高く発音	59人	86.8%	8人	11.8%	1人	1.5%
一番強く発音	26人	38.2%	34人	50.0%	8人	11.8%
もっとも音調を付けて発音	19人	27.9%	14人	20.6%	35人	51.5%

表 9 23 ~ 25 I play soccer every Sunday. という文(IP 5)をどのように聞くか

	① I		② play		③ soccer		④ every		⑤ Sunday	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一番高く発音	9人	13.2%	24人	35.3%	3人	4.4%	4人	5.9%	28人	41.2%
一番強く発音	0人	0.0%	12人	17.6%	25人	36.8%	6人	8.8%	25人	36.8%
もっとも音調を付けて発音	6人	8.8%	11人	16.2%	16人	23.5%	14人	20.6%	21人	30.9%

表 10 26 ~ 28 I like music, too. という文(IP 6)をどのように聞くか

	① I		② like		③ music		④ too	
	人数	割合	人数	割合	人数	割合	人数	割合
一番高く発音	18人	26.5%	13人	19.1%	26人	38.2%	11人	16.2%
一番強く発音	0人	0.0%	8人	11.8%	39人	57.4%	21人	30.9%
もっとも音調を付けて発音	11人	16.2%	14人	20.6%	31人	45.6%	12人	17.6%

IP 2 から IP 6 までの音声を、音声分析ソフト Praat (プラート) を用いて分析した⁵⁾。図 1 は Praat のスクリーンショットで、図 2 から図 6 が IP 2 から IP 6 のピッチ曲線である。

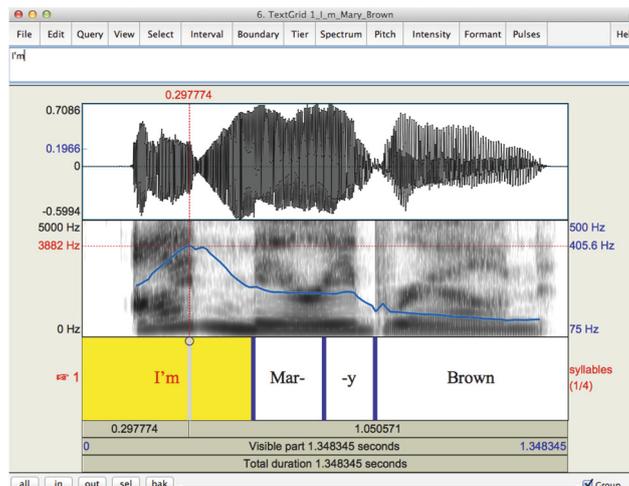


図 1 Praat による音声分析

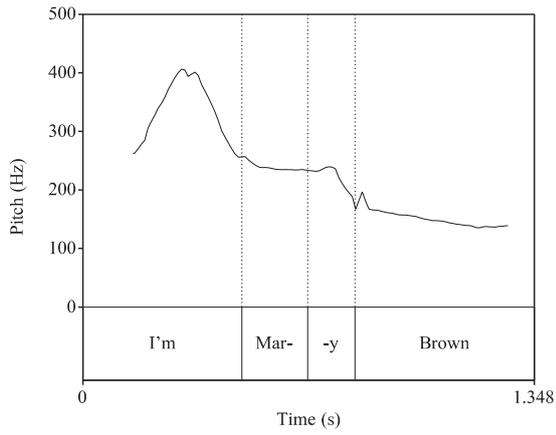


図2 IP2のピッチ曲線

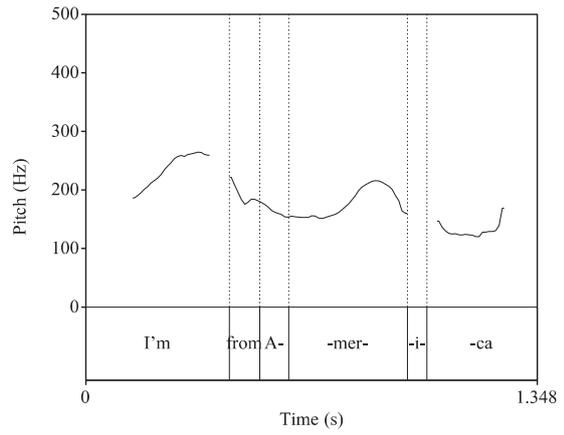


図3 IP3のピッチ曲線

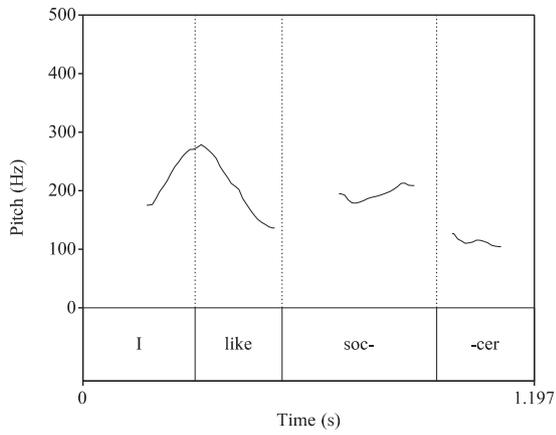


図4 IP4のピッチ曲線

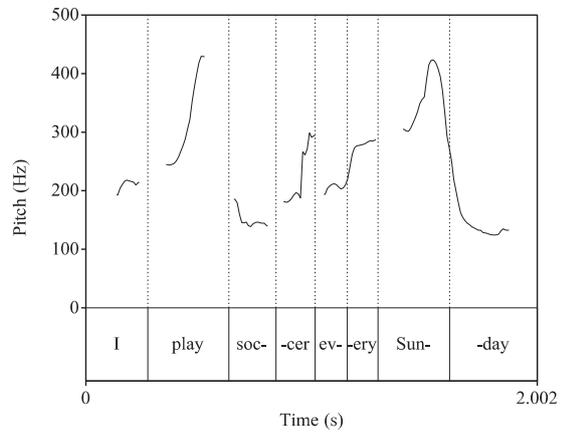


図5 IP5のピッチ曲線

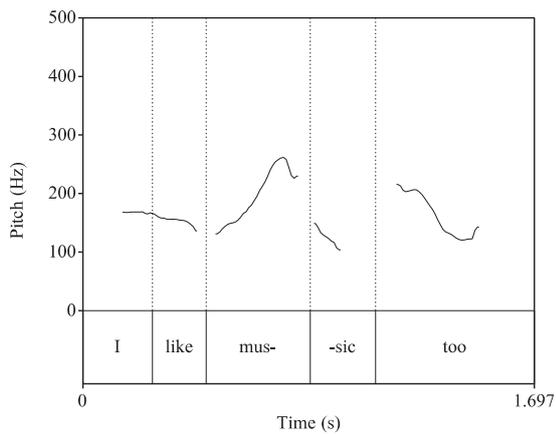


図6 IP6のピッチ曲線

表 8-10 と、図 2, 5, 6 を比較して気づくことは、回答者は高いピッチを聞き分けられていることである。高いピッチの I'm で始まる IP2 について、86.8%が「一番高く発音」と回答している

のに対して、低いピッチのIで始まるIP 5とIP 6については、それぞれ、13.2%と26.5%が「一番高く発音」と回答している。また、主調子音節に関しては、IP 2, IP 5, IP 6 いずれについても、それぞれ、Brown, Sunday, music の回答数がもっとも多くなっている。

IP 2からIP 6は、自己紹介の中での一連の発話であるが、主語I (もしくはI'm) のピッチがまったく異なっていることに注目すべきである。図2から図6を比較すれば、IP 2のI'mのピッチがとりわけ高いことが分かる。また、表8の回答結果から分かるように、このIP 2の高いピッチのIを、日本人英語学習者の多くは、「一番強く発音」されていると認識している。実際、低いピッチのIを含むIP 5, IP 6については、表9と表10が示すように、このIが「一番強く発音」されているという回答はゼロである。

3.4 主調子音節をどのように認識し、どのように聞いているか

設問IIIと設問Vの回答結果から、日本語母語話者が主調子音節をどのように認識し、どのように聞いているかを確認しておこう⁶⁾。

IP 7 I ap'plied for a volun\teer job yesterday.

表 11 17 ~ 19 I applied for a volunteer job yesterday. (IP 7)をどのように発音するか

	① I		② applied		③ for		④ a		⑤ volunteer	
一番高く発音	19人	27.9%	21人	30.9%	4人	5.9%	0人	0.0%	19人	27.9%
一番強く発音	1人	1.5%	19人	27.9%	0人	0.0%	0人	0.0%	39人	57.4%
もっとも音調を付けて発音	1人	1.5%	13人	19.1%	1人	1.5%	1人	1.5%	30人	44.1%
	⑥ job		⑦ yesterday							
一番高く発音	0人	0.0%	5人	7.4%						
一番強く発音	4人	5.9%	5人	7.4%						
もっとも音調を付けて発音	7人	10.3%	15人	22.1%						

表 12 29 ~ 31 I applied for a volunteer job yesterday. (IP 7)をどのように聞くか

	① I		② applied		③ for		④ a		⑤ volunteer	
一番高く発音	12人	17.6%	28人	41.2%	1人	1.5%	0人	0.0%	26人	38.2%
一番強く発音	0人	0.0%	19人	27.9%	1人	1.5%	0人	0.0%	30人	44.1%
もっとも音調を付けて発音	1人	1.5%	9人	13.2%	0人	0.0%	1人	1.5%	34人	50.0%
	⑥ job		⑦ yesterday							
一番高く発音	0人	0.0%	1人	1.5%						
一番強く発音	5人	7.4%	13人	19.1%						
もっとも音調を付けて発音	3人	4.4%	20人	29.4%						

表 11 は設問 III の回答を、表 12 は設問 V の回答をまとめたものである。図 7 は IP 7 のピッチ曲線である。

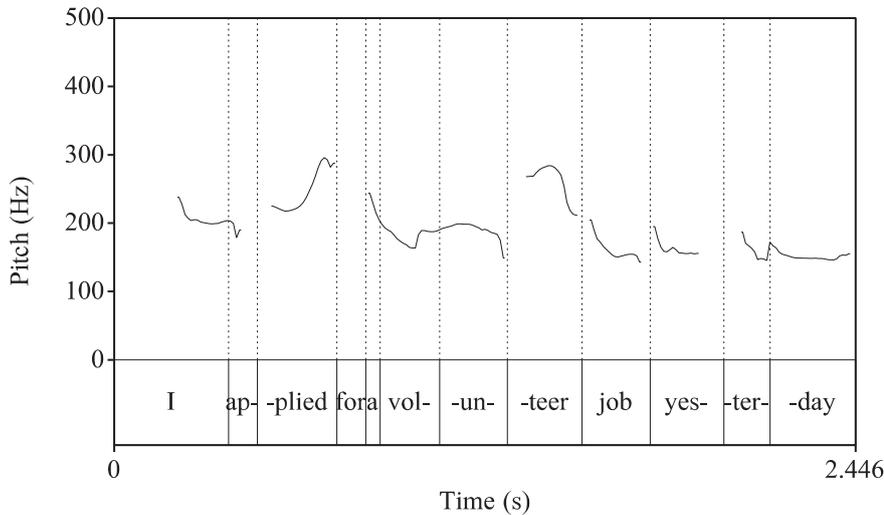


図 7 IP 7 のピッチ曲線

表 11 からは、44.1%の学生が、IP 7 の主調子音節が *volunteer* の第 3 音節であると正しく予測していること、また、表 12 からは、ちょうど半数の学生が、主調子音節を正しく聞きとれていることが分かる。一方、表 12 からは、末尾の時を表す副詞 *yesterday* に主調子音節があると誤って聞いている学生が 29.4%いることも分かる。本稿では、文頭の I について特に注目してきたが、IP 7 の音声を聞く前に回答させた設問 17 では、I を「一番高く発音」すると回答している学生が 27.9%にのぼることも注意しておきたい。

4. おわりに

本稿では、日本人英語学習者（大学生）を対象に行ったアンケート調査をもとに、日本人英語学習者が、イントネーションをどのように理解し、聞いているかを議論した。どの語に主調子音節を置いて発音するかという設問に対しては 55.9%（表 4-7, 11 の正解者の平均）の学生が正しく予測できていたが、主調子音節を正しく聞き取れていた割合は 44.5%（表 8-10, 12 の正解者の平均）に下がる。英文を読むとき、あるいは、聞くときに、どこに焦点があるかを意識した教育がまだまだ行われていないことが感じられる。

本稿では、(1)のような例を挙げ、日本人英語学習者の多くが、特に前提条件や文脈がある訳ではないのに、文頭の I や My に主調子音節を置いて発音する傾向があることを指摘したが、本稿の研究は、それを裏付ける結果となった。IP 2-5, IP 7 の 5 つの文に現れる主語 I を、それぞれの文の中で「一番高く発音する」と回答した学生の平均は 34.4%（表 4-7, 11 の平均）にもものぼる。特に、IP 2 (I'm Mary Brown.) の発音に関する設問では、19.1%が I'm を「もっとも高く発音する」、27.9%が I'm を「もっとも音調を付けて発音する」と回答している。または、IP 3 (I'm from America.) においても、42.6%が I'm を「もっとも高く発音する」、13.2%が I'm を「もっとも音調

を付けて発音する」と回答している。日本人英語学習者が、主語Iをこのように読むと考えるしまう理由のひとつは、もしかすると、図2に示したIP 2 (I'm Mary Brown.)のような読み方にあるのかもしれない。ネイティブスピーカーにとっては、「自然」な発音であっても、それが、英語を初めて(学校で)習う中学校の英語教育において理想的であるとは限らない。具体的に言うと、文頭の主語Iを、図2から図6で示したように、さまざまな異なるピッチで読むことが、本当に英語初学者にとって良いかは疑問である。IP 2のIのピッチは、ネイティブスピーカーにとっては自然であっても、その発音が、授業などでの学習を通して定着・強化してしまい、高い(前)頭部を用いることが必ずしも適切ではない環境で、日本人英語学習者が高い(前)頭部を用いる結果に至ってしまっていることも想定される。

注

- 1) イントネーション句と文は、同義ではない。比較的長い1つの文は、いくつかのイントネーション句にからなり、それぞれのイントネーション句は、多くの場合、句や節などの文法上の境界と一致する。
- 2) 内の最初の文 IP 1 Hello, everyone.では、誰に向かって話しかけているのは明白である。このような場合、末尾の呼びかけ語(final vocative)は、通例、アクセントが置かれず、先行するイントネーション句の尾部(の一部)として付加される(Wells 2006: 153)。
- 3) Wells (2006: 106)では、主調子音節の位置を知るためには、どの複合語が例外的に二重強勢(double stressed)を持っているかを特定することが重要であるとし、二重強勢を持つ傾向がある複合語の例として、¹James Mc¹Gregor, De¹nise ¹Harris などの人名を挙げている。二重強勢を持つ複合語が核音調を担う場合、主調子音節は第二要素に置かれる。
- 4) (5a)における unexpected という語の強勢は/¹ʌn ɪk ¹spekt ɪd/ (Longman Pronunciation Dictionary 3rd edition)であるが、Wells (2006)の原著でも、長瀬(監訳)(2009)においても、(5a)のように¹unexpected ¹letter と表記されている。これは、unexpected に強勢移動(stress shift)が起きているためであると考えられる。
- 5) Praat は、アムステルダム大学の Paul Boersma 氏と David Weenink 氏によって開発されている音声分析を行うためのフリーソフトで、公式ウェブサイト(<http://www.praat.org/>)からダウンロードできる。
- 6) IP 7 の volunteer job は、複合語型のアクセントで発音される。また、時を表す副詞 yesterday に主調子音節は現れず、yesterday は尾部の一部を構成する。

参考資料

(アンケート用紙 1/4)

2017年10月16日

日本人（日本語母語話者）英語学習者の英語発音に関する調査

愛知淑徳大学 中郷 慶

この調査は、日本人（日本語母語話者）英語学習者（大学生）の英語発音に関する認識を調査するためのものです。調査結果は研究のためのみに使用され、統計的に処理されますので個人名が公表されたり、個人が特定されたりすることはありません。みなさんのご協力をお願いします。

回答方法

それぞれの設問に対して、もっとも当てはまる番号を1つ選び、その番号を別途配付したマークシートのマーク欄に回答してください。2の問いのみ該当者は直接、この調査用紙に記入してください。

I. あなた個人のことについてお伺いします。

- 1 英語を学び始めたのはいつ頃ですか
 ① 3才以前 ② 3～6才 ③ 小学校1～3年 ④ 小学校4～6年
 ⑤ 中学校入学後 ⑥ 英語が母語である
- 2 長期の継続的海外滞在歴はありますか？（数週間や1～2か月程度のホームステイや旅行を除く。）
 ① ない ② ある { 期間と滞在先 }
- 3 TOEICのスコア（ベストスコア）はいくつですか？
 ① 295点以下 ② 300～395 ③ 400～495 ④ 500～595
 ⑤ 600～695 ⑥ 700以上 ⑦ 分からない・覚えていない
- 4 自分自身の英語に対する関心の強さを5段階で示すとどの程度だと思いますか？
 ① 1低い ② 2やや低い ③ 3普通 ④ 4やや高い ⑤ 5高い

II. 次のような文（教室での自己紹介）を自分が読む場合に、どのように読むかを答えてください。

Hello, everyone. I'm Mary Brown. I'm from America.
 I like soccer. I play soccer every Sunday. I like music, too.

出典：New Horizon English Course 1

① I'm Mary Brown.という文について

- 5 どの語を一番高く発音しますか。
 ① I'm ② Mary ③ Brown
- 6 どの語を一番強く発音しますか。
 ① I'm ② Mary ③ Brown
- 7 どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて（「高い→低い」または「低い→高い」などの高さの変化をもっとも付けて）発音しますか。
 ① I'm ② Mary ③ Brown

② I'm from America.という文について

- 8 どの語を一番高く発音しますか。
 ① I'm ② from ③ America
- 9 どの語を一番強く発音しますか。
 ① I'm ② from ③ America
- 10 どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて（「高い→低い」または「低い→高い」などの高さの変化をもっとも付けて）発音しますか。
 ① I'm ② from ③ America

(アンケート用紙 2/4)

③ I like soccer. という文について

11 どの語を一番高く発音しますか。

- ① I ② like ③ soccer

12 どの語を一番強く発音しますか。

- ① I ② like ③ soccer

13 どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて（「高い→低い」または「低い→高い」などの高さの変化をもっとも付けて）発音しますか。

- ① I ② like ③ soccer

④ I play soccer every Sunday. という文について

14 どの語を一番高く発音しますか。

- ① I ② play ③ soccer ④ every ⑤ Sunday

15 どの語を一番強く発音しますか。

- ① I ② play ③ soccer ④ every ⑤ Sunday

16 どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて（「高い→低い」または「低い→高い」などの高さの変化をもっとも付けて）発音しますか。

- ① I ② play ③ soccer ④ every ⑤ Sunday

Ⅲ. 次のような会話文を自分が読む場合に、どのように読むかを答えてください（一郎の母 Mrs. Okada と一郎の家に遊びに来ているベッキーとの会話です）。

Mrs. Okada:	I applied for a volunteer job yesterday.
Becky:	Oh, what are you going to do?
Mrs. Okada:	I'm going to work as an interpreter.
Becky:	Wow, that's great.

出典：New Horizon English Course 2

I applied for a volunteer job yesterday. という文について

17 どの語を一番高く発音しますか。

- ① I ② applied ③ for ④ a ⑤ volunteer
⑥ job ⑦ yesterday

18 どの語を一番強く発音しますか。

- ① I ② applied ③ for ④ a ⑤ volunteer
⑥ job ⑦ yesterday

19 どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて（「高い→低い」または「低い→高い」などの高さの変化をもっとも付けて）発音しますか。

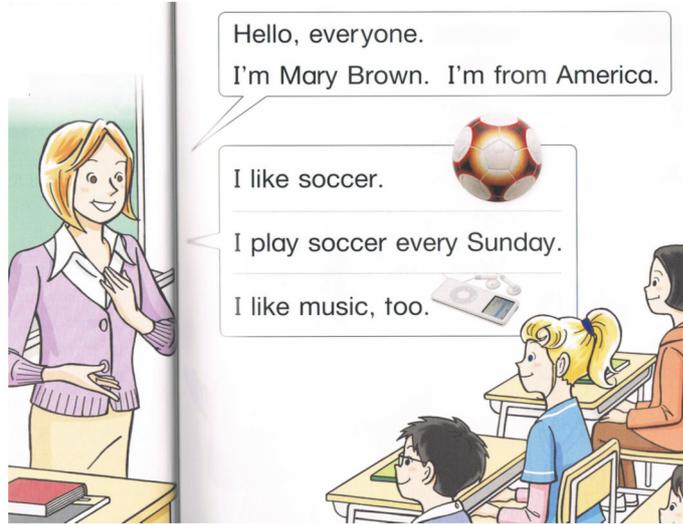
- ① I ② applied ③ for ④ a ⑤ volunteer
⑥ job ⑦ yesterday

学籍番号	氏 名
.....	

指示があるまで裏面に進まないでください。

(アンケート用紙 3/4)

IV. 教科書に準拠したCDの音声を聞き、それぞれの設問に教えてください。



① I'm Mary Brown.という文について

20 どの語が一番高く発音されていますか。

- ① I'm ② Mary ③ Brown

21 どの語が一番強く発音されていますか。

- ① I'm ② Mary ③ Brown

22 どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて（「高い→低い」または「低い→高い」などの高さの変化をもっとも付けて）発音されていますか。

- ① I'm ② Mary ③ Brown

② I play soccer every Sunday.という文について

23 どの語が一番高く発音されていますか。

- ① I ② play ③ soccer ④ every ⑤ Sunday

24 どの語が一番強く発音されていますか。

- ① I ② play ③ soccer ④ every ⑤ Sunday

25 どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて（「高い→低い」または「低い→高い」などの高さの変化をもっとも付けて）発音されていますか。

- ① I ② play ③ soccer ④ every ⑤ Sunday

③ （途中でポーズを置かずに読まれる）I like music, too.という文について

26 どの語が一番高く発音されていますか。

- ① I ② like ③ music ④ too

27 どの語が一番強く発音されていますか。

- ① I ② like ③ music ④ too

28 どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて（「高い→低い」または「低い→高い」などの高さの変化をもっとも付けて）発音されていますか。

- ① I ② like ③ music ④ too

(アンケート用紙 4/4)

Mrs. Okada: I applied for a volunteer job yesterday.
Becky: Oh, what are you going to do?
Mrs. Okada: I'm going to work as an interpreter.
Becky: Wow, that's great.
Mrs. Okada: I think I can do something for others.
Becky: I'm sure it'll be a wonderful experience.



④ I applied for a volunteer job yesterday. という文について

- 29** どの語が一番高く発音されていますか。
① I ② applied ③ for ④ a ⑤ volunteer
⑥ job ⑦ yesterday
- 30** どの語が一番強く発音されていますか。
① I ② applied ③ for ④ a ⑤ volunteer
⑥ job ⑦ yesterday
- 31** どの語を読むときに、音調の変化をもっとも付けて（「高い→低い」または「低い→高い」などの高さの変化をもっとも付けて）発音されていますか。
① I ② applied ③ for ④ a ⑤ volunteer
⑥ job ⑦ yesterday

「ELS 2 (英語発音)」(愛知淑徳大学交流文化学部開設科目) シラバス

266106	ELS 2(英語発音)	中郷 慶
1130		
	1・2年 後期	2単位(選択)
【授業の概要】		
日本人が英語を話したり読んだりするときに誤りやすいリズム、イントネーション、発音の問題などに留意し、学生のレベルに合わせながら、演習形式で英語の発音訓練を行う。		
【授業の目標】		
英語のリズム・イントネーションの特徴を正しく理解するとともに、多くの日本人英語学習者が不得手とする単音の発音、連結や脱落などに注意しながら、英文をより英語らしく読めるようになること。		
【授業計画】		
[v]と[b], see (sea)と she を正しく発音し分けたり、聞き分けたりすることは、多くの日本人が不得手とする。英語(および日本語)音声の特徴は何かという理論を解説するとともに、それが実践できるように、映画・ドラマ・歌などを題材としてさまざまな訓練を行う。[v]は上の歯で下唇を噛むとか、[r]は舌を巻いて発音するなど、日本人に共通する間違い・思い込みである。そのような理解のどこがどのように間違っているかを考えることも、この授業の大きなテーマのひとつである。		
第1回	英語のリズム(1): アクセントとリズム	
第2回	英語のリズム(2): 内容語と機能語	
第3回	句と複合語	
第4回	リーディング演習(1): マザーグース、小説	
第5回	英語のイントネーション(1): イントネーションの基本パターン	
第6回	英語のイントネーション(2): イントネーションと意味	
第7回	発音の仕組み(1): 母音	
第8回	発音の仕組み(2): 子音	
第9回	音素と異音	
第10回	間違いやすい子音	
第11回	間違いやすい母音	
第12回	シャドーウィングとディクテーション	
第13回	リーディング演習(2): アナウンス	
第14回	リーディング演習(3): 映画、ドラマ	
第15回	まとめ	
【授業外学習の指示】		
授業外での課題(発音練習やハンドアウトの課題)は、必ず、指示通りに行うこと。		
【評価方法】		
授業への取り組み姿勢と授業外での課題を指示通りに行っているかを特に重視する。授業への取り組み姿勢と、課題、学期末試験の成績によって総合的に評価する。		
【テキスト】		
こうすれば英語が聞ける: Ways to be better listeners (中郷 安浩・中郷 慶共著 英宝社)		
【参考文献・資料】		
音声学(朝倉日英対照言語学シリーズ2)(服部義弘編 朝倉書店)		

参考文献

Armstrong, Liliás E. and Ward, Ida C. (1931) *Handbook of English Intonation*, Second Edition, Cambridge: Heffer.

Bolinger, Dwight (1986) *Intonation and its Parts: Melody in Spoken English*, London: Edward Arnold.

Boersma, Paul and Weenink, David (2017) *Praat: doing phonetics by computer* [Computer program], Version 6.0.36, retrieved 11 November 2017 from <http://www.praat.org/>

Halliday, Michael A. K. (1967) *Intonation and Grammar in British English*, The Hague: Mouton.

中郷 慶(2012)「イントネーション」, 服部義弘(編)『音声学』(朝倉日英対照言語学シリーズ2), 東京:朝倉書店.

中郷 慶(2017)「日本人英語学習者におけるイントネーションに関する諸問題(1)」, 『愛知淑徳大学論集—グローバル・コミュニケーション学部篇—』1, 79-90.

Roach, Peter (2009) *English Phonetics and Phonology: A Practical Course*, Fourth Edition, Cambridge: Cambridge University Press.

Tench, Paul (1996) *The Intonation Systems of English*, London: Cassell.

渡辺和幸(1994)『英語イントネーション論』, 東京:研究社出版.

Wells, John C. (2006) *English Intonation: An Introduction*, Cambridge: Cambridge University Press.
(長瀬慶來(監訳)(2009)『英語のイントネーション』研究社.)

Wells, John C. (2008) *Longman Pronunciation Dictionary*, Third Edition, Harlow: Pearson Education Limited.